

News Letter No.48

21年5月21日(木) 発信

# Sato Project

## Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—  
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト(加藤) e-mail:[sato@chikyu.ac.jp](mailto:sato@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



「納涼図屏風」 久隅守景 作  
(東京国立博物館 所蔵)

## 第9回 ユーラシア農耕史 「さまざまなウリたち」を終えて

田中克典 (総合地球環境学研究所)

## 第9回 ユーラシア農耕史「さまざまなウリたち」を終えて

田中克典（総合地球環境学研究所）



佐藤プロジェクトが主催する連続公開講座「ユーラシア農耕史」では風土のもとで成立した農耕史について議論しています。全8回まではモンスーンではイネ、牧場・砂漠ではムギと主に風土と主要作物との関係から農耕史を語ってきましたが、第9回からは他の作物にもスポットをあてていくので、少し雰囲気が変わりました。加えて、これまでは同志社大学の今出川キャンパス周辺で開催していたのですが、参加者にプロジェクトの研究室を一度は見学して頂きたい思いもありました。新年最初と言うことも相まって、去る1月17日（土）は総合地球環境学研究所にて連続公開講座「ユーラシア農耕史－風土と農耕の醸成－」の第9回「さまざまなウリたち」が開催されました。



講座前半は鞍田崇さんの司会進行でまず、筆者、加藤鎌司先生（岡山大学大学院）、藤下典之先生（元大阪府立大学）の順で研究成果（ウリに対する思い？）を紹介し、後半は佐藤先生の進行で対談が行われました。



ここでは「ウリ」全般としていますが、実のところ、講座が始まる以前から藤下先生と加藤先生からはヒョウタンとメロンについて幾度となくその魅力を伺っていました。そこで、この話を議論に生かせないかと考え、筆者の話題提供では、世界各地で栽培されているウリ類や遺跡から出土したウリ類を紹介しながら、ヒョウタンとメロンにスポットを当ててみました。



講座の演者  
左から加藤先生、筆者、藤下先生



講座で展示したヒョウタンの民具  
全て藤下先生の所蔵品



ウリと聞くとヒョウタン（瓢箪）、カボチャ（南瓜）、スイカ（西瓜）、キュウリ（胡瓜）、ニガウリ（苦瓜）、トウガン（冬瓜）、ヘチマ（糸瓜）、メロン（甜瓜、越瓜等）と、漢字に「瓜」が付いていますが、この中でヒョウタンとメロンは最も広い範囲で栽培されています。その歴史は長く、ヒョウタンが約 1 万年前に世界各地で利用されていますし、メロンも弥生時代の頃には日本にありました。加えて、これらの作物は形態や用途が多様で、ヒョウタンにいたっては楽器だけで百数十種類あります。講座では多くを語る事が出来ませんでした。資料を調べていると、ヒョウタンやメロンは長い農耕史の中で人を介して分布域を広げ、多様な形や用途が生み出された作物であり、また人の歴史や文化が刻まれた作物の一つであるにつくづく痛感させられました。



加藤先生からは、メロンの DNA 分析と日本に古くからあるマクワ・シロウリの起源について語っていただきました。これまでの分析に基づくと、メロンは欧米・西アジアのグループと東南アジア・東アジアのグループに大きく分けられます。この分かれ方はともすると、砂漠・牧場の風土とモンスーンの風土との分かれ方にも通じており、一つの作物がそれぞれの風土のもとで成立してきたことを示した内容でした。



遺跡から出土したメロン仲間の種子 (講座の展示品)  
全て藤下先生の所蔵品



また、マクワ・シロウリの起源では現地調査に話題が及びました。話を伺うと、東南アジアでは雨季にイネ（陸稲）とメロンが焼畑にてセットで栽培されているとのことで、これまでモンスーンの風土を語るために取り上げたイネとメロンとの関係史を感じさせる内容でした。一方で、東南アジアでは乾季につくられているメロンもあるとのことで、これまでモンスーンの風土では稲作を通じて「水」がある時の風土を連想しましたが、「水」がない時の風土もあり、まさしく雨期と乾期のモンスーンを感じる話題でした。



左図はラオスの焼畑とリクトウと混作したメロン



講座の風景  
演者は藤下先生



藤下先生からは、長年研究してこられた雑草メロンの生態と形態について現地調査を交えながら紹介していただきました。「雑草」と聞くと作物の生育を阻害するイメージがあります。しかし、雑草メロンは作物の傍らに生えているだけで何ら邪魔をすることがなく、最近では、除草や除草剤の影響で発見が難しいメロンとのことで、「雑草」とはなんだろう？と考えさせられました。



また、メロンの伝来を考えるうえで、遺跡の便所からメロンの種子が大量に見つかっていることや、牛の糞からメロンが発芽していたことに閃き、ご自身で下したメロンの種子が発芽するか実験されたとのことでした。その結果から、家畜や人の糞からメロンが伝来した「糞媒」の可能性について話していただきました。この話はあまりにも強烈で、先生のメロンに対する並々ならぬ執念を感じさせられ、後半の対談でも「糞媒」から議論が始まりました。



さて、講座開始時に司会の鞍田さんが屏風絵を紹介されました（表紙絵参照）。その絵には父親、母親とその子供が棚の下で夕涼みをしており、棚にはヒョウタンが描かれていました。絵を思い述べられた言葉（「幸せのあるべき姿」）は、思い返してみると、これまでの演者が述べられたそれと一風変わった趣があり、「ウリ」という言葉がもつ奥深さと魅力を改めて感じさせられました。